

【論文】

## 日本のリカード研究の独自性と多様性

福田進治

スラッファ編『リカード全集』（1951-73）刊行後、欧米のリカード研究はスラッファのリカード解釈の強い影響の下で発展してきたが、日本のリカード研究はスラッファの解釈から刺激を受けながらも、やがて独自の道を見出し、独自の形で発展してきた。羽鳥卓也（1922-2012）はスラッファの解釈を批判的に検討しながら、その後の日本のリカード研究の発展の基礎を築いた。中村廣治（1931-2014）は羽鳥のスラッファ批判から刺激を受け、羽鳥と論争しつつ、羽鳥とともに日本のリカード研究を牽引してきた。千賀重義（1943-）は羽鳥と中村に続き、リカード研究に取り組み、日本のリカード研究のさらなる発展に貢献してきた。彼らは押し並べて歴史的事実の追求を重視する立場から、スラッファの初期リカード解釈を批判した上で、リカードの労働価値理論の研究に取り組み、欧米には見られない独自の研究成果を挙げてきた。彼らを中心とする日本のリカード研究の潮流を、本稿では主流派と呼ぶ。このように羽鳥・中村・千賀のような研究者たちが主流派を形成したことは、日本のリカード研究の顕著な独自性であるといえる<sup>1)</sup>。

しかし、同じ時期の日本のリカード研究においては、主流派と異なる立場からの有力な研究も見られる。菱山泉（1923-2007）はスラッファの経済学の研究者として、スラッファの貢献を重視する立場からリカードの経済学の再評価を試みた。森嶋通夫（1923-2004）は一般均衡理論の研究者として、スラッファの立場を批判しながら、一般均衡理論の枠組みによるリカードの経済学の再構成を試みた。菱山と森嶋はそのリカード解釈は互いに対立するが、ともに現代的意義の評価を重視する立場からリカードの価値・分配・成長の理論の研究に取り組み、主流派とは異なる貢献を生み出した。このような主流派とは異なる日本のリカード研究を、本稿では非主流派と呼ぶ。非主流派の存在は日本のリカード研究の幅広さ、すなわちその多様性を示すものであるといえる。日本のリカード研究は羽鳥・中村・千賀のような主流派の貢献を中心としながらも、菱山・森嶋といった非主流派の貢献を含めて発展してきた。

本稿の課題は、スラッファ編『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究の多様な貢献を振り返り、その研究方法を見直すことを通して、日本のリカード研究の独自性と多様性を整理・検討することである。筆者はこれまで欧米のリカード研究と比較しながら、日本のリカード研究の独自性を明らかにすることに努め、その再検討と再評価を進めてきた。本稿では筆者の日本のリカード研究史に関する研究の総括として、日本のリカード研究の独自性と多様性をあらためて明らかにした

上で、追加的な考察を加えるものである。

## 1 日本のリカード研究の貢献

### (1) 主流派(羽鳥・中村・千賀)の貢献

最初に、日本のリカード研究の主流派による代表的な貢献として、羽鳥・中村・千賀の初期リカードの利潤理論の研究、リカードの労働価値理論の研究、リカード『原理』の理論構成の研究を振り返る。

第1に、初期リカードの利潤理論の研究について振り返る。日本のリカード研究の主流派の展開は、スラッフアの「穀物比率論」解釈に対する批判を端緒とする。スラッフアは『リカード全集』「編者序文」において、初期リカードは農業部門の投入と産出がともに「穀物」のみから構成されるため、農業利潤率は「穀物比率」として、価格決定の問題に関わりなく決定すると考えていたと主張した。また、初期リカードの『試論』や書簡がこうした解釈を正当化する間接的な証拠になると主張した(Sraffa 1951, pp.xxxi-ii)。こうしたスラッフアの「穀物比率論」解釈は、新古典派の限界原理を批判し、物的な産業連関構造の論理を強調するスラッフア自身の経済学の立場を反映するものであるといえる。その後、スラッフアの解釈は多くのリカード研究者たちに受け入れられ、その後の欧米のリカード研究の発展を方向付けることとなった。

スラッフアの「穀物比率論」解釈は日本にも紹介され、当初は欧米の新しいリカード解釈として歓迎されていた。しかし、羽鳥は「初期リカードウの価値と分配の理論」(1965 [1972])において、こうしたスラッフアの解釈を批判した。羽鳥の批判は日本のみならず世界で最初のスラッフア批判であった<sup>2)</sup>。ここで羽鳥はスラッフアが「穀物比率論」解釈の間接的な証拠として挙げた1814年のリカードとマルサスの往復書簡と1815年刊行のリカード『試論』を検討し、それらが必ずしも「穀物比率」の論理を示していないと主張した。従って、スラッフアの「穀物比率論」解釈は現存の文献によって支持できないとした(羽鳥 1972, pp.197-200)。こうした羽鳥のスラッフア批判は日本のリカード研究者たちに強い刺激を与えた。そして、多くのリカード研究者がスラッフアの解釈を批判しながら、初期リカードの研究に取り組むようになった。

こうした状況の中で、千賀は「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」(1972)において、初期リカードは「部門別」に利潤率の決定を説明していたという「部門別利潤率規定論」解釈を提示した。千賀はやはり1814年の書簡と1815年刊行の『試論』を検討した上で、初期リカードは農業部門については物的比率の論理を前提に、労働生産性の低下が利潤率の低下もたらし、製造業部門については賃金と利潤率の相反関係を前提に、貨幣賃金の上昇が利潤率の低下をもたらすと考えていたと主張した。さらに、これらの初期リカードの論理はいずれも不完全なものであり、その不完全さを克服するために、リカードは労働価値理論の形成に邁進していったとした(千賀 1972, pp.88-94)。こうした千賀の解釈はやがて多くの日本のリカード研究者たちに受け入れられていった。そして彼らは彼ら自身の初期リカード研究を出発点として、リカードの労働価値理論の発展過程に関

する研究に精力的に取り組むようになった<sup>3)</sup>。

第2に、リカードの労働価値理論の研究を振り返る。先述のように、羽鳥はスラッファの「穀物比率論」解釈を批判したが、その後の『リカードウ研究』（1982）においては、むしろスラッファの解釈を基本的に継承しながら、リカードの労働価値理論の発展過程に関する研究を推し進めていった。スラッファは『リカードウ全集』「編者序文」の中で、リカードの労働価値理論の「修正」の問題についても詳細に検討し、リカードの労働価値理論の立場が「後退」しなかったことや、「修正」の論点や「不変の価値尺度」の定義に変化が見られたことをなどを明らかにした（Sraffa 1951, pp.xxxvii-xlv）。羽鳥はこうしたスラッファの解釈の不十分な部分を補充・修正するという形で自らのリカードの労働価値理論の研究を推し進め、労働価値理論の成立の論理やリカードとマルサスの論争の影響などを明らかにしていった。羽鳥の研究から刺激を受けながら、中村や千賀もリカードの労働価値理論の研究に取り組み、以下に見るような独自の研究成果を収めていった。

中村は『リカードウ経済学研究』（1996）において、リカードの労働価値理論の発展過程に関する問題を中心に、リカードの経済学に関する諸問題を検討したが、最も顕著な貢献はリカードの労働価値理論の成立の論理に関するものである。中村によると、リカードは『試論』刊行後、スミスの連動論を批判することを通して、労働価値理論の立場を確立していったが、ここで「連動論に基づく連動論の顕在化の否定」と呼ぶべき論理が決定的な役割を果たした。すなわち、商品の価格を商品の価値と貨幣の価値の比率と見なしたとき、貨幣賃金の変化は商品の価値と貨幣の価値の両者を同様に変化させるため、商品の価格は変化しないが、その商品を生産するための投下労働量の変化は商品の価値のみを変化させ、商品の価格を変化させる（中村 1996, pp.20-27）。こうした中村の解釈は、リカードの労働価値理論が生産費説の論理に基づいて成立するもので、マルクスの剰余価値理論とはまったく異なる理論であることを示唆している。

千賀は『リカードウ政治経済学研究』（1989）において、リカードの経済学に関わる諸問題について検討したが、とくに後半部分でリカードの労働価値理論をめぐる問題について集中的に検討した。その中でも顕著な貢献はリカードの労働価値理論に関する二元論的な解釈であると思われる。千賀によると、リカードは『原理』の中で分配の変化の基準として「生産物の比率」を重視しており、それは「投下労働量の比率」に依存するという意味で、それらの議論はリカードの「相対価値論」と呼ぶことができる。他方、晩年のリカードは投下労働量に依存して決定する価値の絶対水準を測定するために「不変の価値尺度」の探求に専念するようになったが、それらの議論はリカードの「絶対価値論」と呼ぶことができる（千賀 1989, pp.186-249）。こうした千賀の解釈はリカードの労働価値理論の発展過程に関する理解を前提に、その理論的貢献を解明しようと試みたもので、日本のリカード研究の顕著な貢献の一つであるといえる<sup>4)</sup>。

第3に、リカード『原理』の理論構造の研究を振り返る。リカード『原理』の理論編と呼ばれる冒頭の諸章について、その不自然な配列をどのように理解するかはリカード研究の懸案の一つだった。スラッファは『リカードウ全集』「編者序文」において、リカードが「地代の問題を片づける」

と述べたことを想起するなら、第1章価値論・第2章地代論・第3章鉱山地代論を「価値の理論」として把握でき、第4章価格論を第5章賃金論の序論と見なすなら、第4章価格論・第5章賃金論・第6章利潤論を「分配の理論」として把握できるとする解釈を提示した (Sraffa 1951, p.xx.iii)。このときリカードの経済学の全体像はスラッファ自身の経済学と同様、「価値と分配の理論」として把握することが可能になる。

こうしたスラッファの解釈を受けて、羽鳥は『古典派経済学の基本問題』(1972)において、リカード『原理』の理論構造の問題を検討した。羽鳥はスラッファの解釈を評価しつつ、その説明は依然として不十分であり、第2章地代論(と第3章鉱山地代論)が第4章価格論の前に置かれた本質的な理由が分からないと指摘した。そして、羽鳥はリカード『原理』や書簡の叙述を検討しながら、リカードは第1章価値論の前半で純粋な労働価値理論の論理を提示した後、後半で資本蓄積(資本構成の相違)の問題を検討し、続いて第2章地代論(と第3章鉱山地代論)で土地所有(肥沃度の相違)問題を検討した上で、彼の価値論を確立したと主張した(羽鳥 1972, pp.272-81)。こうした羽鳥の解釈はスラッファの解釈とは異なり、リカードの経済学を「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」と把握することを意味する<sup>5)</sup>。

スラッファや羽鳥の解釈を受けて、中村も『リカードゥ体系』(1975)において、リカード『原理』の理論構造の問題を検討した。中村は羽鳥の解釈を基本的に継承した上で、マルクスの価値理論と価格理論の二重構造を意識しながら、リカードの経済理論の構造を再検討した。そして、中村は第1章価値論を「価値・剰余理論」、第2章地代論(と第3章鉱山地代論)を「特殊・具体的な形態における剰余価値論」、第4章価格論を「現実・具体の複雑な事情における剰余価値論」と呼んだ。そして、これらを基礎として第5章賃金論と第6章利潤論の「分配論」の展開が可能になるという(中村 1975, pp.191-201)。こうした中村の解釈は「価値論」と「価格論」の二重構造を前提として「分配論」を把握する独自の解釈である<sup>6)</sup>。

以上のように、日本のリカード研究の主流派はスラッファの解釈から刺激を受けながらも、文献的にも理論的にも綿密な検討を積み重ね、欧米のリカード研究に見られない独自の研究成果を生み出していった。それらは第一義的にリカードの経済学の歴史的本来の姿を追求しようとする試みであったといえる。

## (2) 非主流派(菱山・森嶋)の貢献

次に、日本のリカード研究の非主流派による代表的な貢献として、菱山と森嶋のリカード研究を振り返る。

菱山は『リカード』(1979)において、スラッファの研究者という立場から、リカードの資本蓄積の理論と価値の理論を検討した。この著書の冒頭で、菱山は「近代経済学者によるリカード評価の歴史はおおむね誤解の歴史であった」として、新古典派的なりカード解釈を批判する立場を表明した。さらに、スラッファ編『リカードゥ全集』「編者序文」で提示されたリカード解釈がリカード研

究を刺激したことを指摘するとともに、スラッファの経済学は「リカードの経済学の現代版」であるとして、リカードとスラッファの関係を重視する立場を鮮明にした（菱山 1979, pp.1-2）。こうした菱山のリカード研究はスラッファのリカード解釈を全面的に支持するものではないが、日本における代表的なスラッファ派のリカード研究とってよいだろう。

リカードとスラッファの関係を検討する際、菱山が最も重視したのは、経済全体を「諸産業の投入産出の網の目の連関構造」として把握する立場である。菱山によると、ケネーやスミスはこうした産業連関構造の図式をもっていたが、リカードは必ずしも明示的に産業連関構造を把握し、価値理論の基礎としていなかった。しかし、スラッファはケネーやスミスの産業連関構造の図式をリカードの価値と分配の理論の基礎として採用することによって、リカードの経済学を再構成したという（菱山 1979, pp.156-60）。こうして、菱山は安易にリカードとスラッファ結びつけようとしたのではなく、むしろ両者の相違を理解した上で、スラッファの貢献を評価したのである。この場合、スラッファの貢献とは、スラッファのリカード解釈というより、スラッファの『商品による商品の生産』（1960）における彼自身の経済理論を指している。

とはいえ、菱山はリカードとスラッファについて、「諸商品の価格が体系全体の所与の生産方法に規定されて決定する」と考える立場が共通していることも指摘している。その具体的な形式が労働価値理論である。リカードは諸商品の価値が投下労働量に比例して決定するという立場を擁護しようとしていたが、菱山によると、そうしたリカードの営為は失敗に終わった。しかし、菱山によると、そもそも労働価値理論とは単純に諸商品の価値が投下労働量に比例することを主張する理論ではなく、むしろ「価格体系が生産諸条件に依存して決めるという接近方法を集約的に表現したものである」という（菱山 1979, pp.160-01）。そして、スラッファはリカードからそうした接近方法を受け継いで現代経済学の世界の中で再構成した。こうした意味で、菱山は、スラッファの経済学は「リカードの経済学の現代版」であると主張したのである<sup>7)</sup>。

他方、森嶋は『リカードの経済学』（Morishima 1989 [2003]）において、一般均衡理論の研究者という立場からリカードの分配と成長の理論を検討した。この著書の冒頭で、森嶋は、リカードはマルクスとワルラスの「共通の師」として、リカード、マルクス、ワルラスは「古典的一般均衡理論」という理論的核心を共有していたと主張した（Morishima 1989, pi / 高増他訳2003, pi）。そして、森嶋は同書の中でリカードの経済学について検討しながら、スラッファの「標準商品」やパシネッティのリカード体系の定式化を精力的に批判した。このように森嶋は菱山とまったく対照的に、リカードとスラッファの関係を重視する立場を批判しながら、新古典派的なりカード解釈を提示しようと試みた。その主張はホランダ（1979）に代表される欧米の新古典派的なりカード解釈をさらに徹底させた新古典派的なりカード解釈であったといえる。

主流派の研究者たちはリカード体系における労働価値理論の意義を重視し、菱山も労働価値理論に関する独自の解釈に基づいてその意義を評価したが、森嶋は労働価値理論の意義を明確に否定した。森嶋によると、リカードは確かに労働価値理論を用いて分配と成長の分析を試みたが、それは

リカードが分配と成長の分析のために必要な費用－価格方程式を扱う数学的能力をもっていなかったためにすぎない。従って、リカードがより高度な数学的能力をもっていたなら、労働価値理論を放棄することに同意していただろう (Morishima 1989, pp.8-10/pp.9-11)。ここには主流派のようにリカードの歴史的本来の姿を追求しようという姿勢はまったく見られない。むしろ現代経済学のツールを用いてリカードの経済学を再構成しようとする姿勢が鮮明である。

こうして森嶋はリカード体系から労働価値理論を排除することを宣言した上で、その再構成を試みた。すなわち、森嶋はリカードの想定を出発点としながら、一般均衡理論の枠組みを用いてリカードの議論を再構成し、賃金－利潤フロンティアを導出することによって、リカードの分配と成長の相互関係に関する命題を再検討した (Morishima 1989, pp.17-33/pp.21-38)。こうした検討を踏まえて、森嶋は「リカードは一般均衡理論の創始者でなかったとしても、その先駆者である」と述べながら、リカードの経済学をワルラスの経済学に先立つ一般均衡理論の貢献と見なすことができると主張した (Morishima 1989, pp.149/p.167)。そして、リカードに始まりマルクスとワルラスを経てケインズに至る経済学の系譜を再構成したのである<sup>8)</sup>。

以上のように、スラッファとの関係を重視する菱山のリカード解釈と、一般均衡理論の枠組みを用いた森嶋のリカード解釈は鋭く対立する。しかし、菱山と森嶋は現代経済学の概念や枠組みを用いてリカードの経済学を再構成する立場について共通しており、ともにリカードの歴史的本来の姿を追求する主流派の立場とは大きく異なる。

## 2 日本のリカード研究の方法

### (1) 主流派の方法 (羽鳥・中村・千賀)

ここでは、前節で見たような日本のリカード研究の主流派の貢献を生み出した要因として、羽鳥・中村・千賀の研究方法に関する叙述を見直す。

羽鳥は『古典派資本蓄積論の研究』(1963)において、後の彼自身のリカード研究を含めた経済学史研究の方法について検討した。まず、羽鳥は次のように述べた。

「およそ経済学史研究の目的は、ただ単に過去の経済学説の内容を正確に理解することにあるだけではなく、それを通じて究極的には資本主義経済社会のメカニズムの解明そのものにとって有効な迂回手段を提供することにある。したがって、古典派経済学について学ぼうとする場合にも、われわれは経済理論史上における古典派理論の意義と限界とを確定することに最大の努力を注ぐべきであろう。」(羽鳥 1963, p.7)

ここで羽鳥は経済学史研究はただ単に過去を事実を明らかにすることではなく、現代と関わる意識が不可欠であり、そのために理論的側面の検討が重要であると述べている。しかし、羽鳥はこれに続いて次のように述べた。

「当然のことだが、批判的研究は、それが行われる前に、あらかじめ批判すべき対象そのものの忠実な理解に達していなければならない。……古典派それ自体の論理に即してその理論体系

を再構成するという作業をぬきにして、古典派の理論的欠陥ないし稚拙を暴露することだけに終始すれば、その批判の仕方がいかに鋭利もしくはエレガントであろうと、所詮は論理の遊戯に陥るものといわなくてはならない。」(羽鳥 1963, p.8)

ここで羽鳥は現代を意識する研究のためにも、その前提として、過去の事実に忠実でなければならないと述べている。そして、過去を事実に忠実であることなしに過去の事実を批判することは無意味であると述べている。このような姿勢は羽鳥の生涯に渡って一貫していた。従って、羽鳥はリカードの経済学について、その現代的意義を軽視したのではなく、むしろ現代的意義を明らかにするためにこそ、歴史的事実の追求に力を注いだのである。

こうした羽鳥の研究方法は中村や千賀を含めて、日本のリカード研究の主流派の研究者たちに受け継がれていった。中村は『リカードゥ体系』において、「このような時代に生き、その課題に敏感に反応しつつ、生成し、確立するリカードゥ体系を追跡」することを通して、「リカードゥ体系の内的編成を照射する」ことを目指すと述べた。その際、中村はリカードに「内在」することを強調している。それは「ときどきの主要著作を環節とし、おりおりの書簡がこれを連関する役割を果たしつつ進められる」という。こうして中村は『原理』のような主著だけでなく、書簡のようなさまざまな資料を検討することが必要であると主張したのである(中村 1975, pp.1-2)。

また、千賀は『リカードゥ政治経済学研究』において、「デイヴィド・リカードゥの政治経済学を、彼の思考に内在しながら、しかも現代に生きるわれわれの観点から評価すること」を目指すと述べた。さらに、千賀は「より一層リカードゥの実像に近づくことこそ、現代に生きるわれわれのリカードゥ研究の役割」であると述べた。こうして羽鳥や中村と同様、千賀もリカードの経済学の現代的意義を明らかにするためにこそ、リカードに「内在」し、リカードの「実像」を明らかにすることが必要であると主張したのである(千賀 1972, pp.i-ii)。

このように日本のリカード研究の主流派の研究者たちは、押し並べて、現代的意義の評価のためにこそ、歴史的事実の追求が必要であることを強調した。そして、こうした方法がリカード研究においても、主著『原理』のみならず、書簡やパンフレット等の膨大な文献資料の渉獵と綿密な検討を通して、リカードに「内在」しながら、リカードの「実像」を明らかにするという彼らの姿勢につながったものと考えられる<sup>9)</sup>。

## (2) 非主流派(菱山・森嶋)の方法

次に、日本のリカード研究の非主流派の貢献を生み出した要因として、菱山と森嶋の研究方法に関する叙述を見直す。

菱山は『リカード』の冒頭で、『原理』のみを参照しながらリカードの経済学を検討することを表明した。そして、菱山は『原理』以外の多くの文献を検討しないことが不十分であると自覚しながら、「『研究書』としては明らかに不十分であるが、『入門書』としては許されるかもしれない」と述べた(菱山 1979, pp.3-4)。もっとも、菱山の『リカード』には高度な理論的内容が含まれるから、

とても「入門書」と呼べるものではない。従って、これらの叙述は菱山の謙遜であったというべきかもしれないが、同時に菱山には主流派のような綿密な文献資料の検討を行わなかったことに負い目があったのかもしれない。

ところが、菱山は『ケネーからスラッファへ』（1990）において、スラッファの「穀物比率論」解釈を検討しながら、「第一義的に問われているのは、農業利潤率の先決性テーゼの『合理的基礎』であって、こうした合理的基礎の文献的実証ではない」として、歴史的事実の追求を重視しない姿勢を打ち出した。さらに、菱山は「仮に『穀物比率論』がリカード文献にまったく見出されなくても、それは農業利潤率が一般的利潤率を規定するという、リカードの利潤命題の『合理的基礎』として存立しうるであろう」と述べた（菱山 1990, p.43,51）。こうして菱山は現代的意義の評価の問題が歴史的事実の追求よりも優先するという立場を鮮明にした<sup>10)</sup>。

森嶋の立場は菱山に近い。森嶋は『リカードの経済学』において、菱山と同様に『原理』のみを検討対象とすることを表明した。そして、森嶋は、自分は経済思想史家ではなく、経済理論家だから、それが許されるとしながら、そのメリットとして、「経済思想史家の専門家よりも、これらの著作をより深く、より厳密に読むことができ、その結果、今日の経済学者がこれらの著作から学ぶことができる」と述べた（Morishima 1989, p.3/p.3）。このように森嶋は『原理』のみを検討することの許しを請うだけでなく、そのメリットとして、リカードの経済学をより厳密に検討できること、そしてリカードの経済学の現代的意義をより明快に提示できることを主張した。

さらに、森嶋は「森嶋のリカード解釈：回答」（1996）において、自身の研究方法は膨大な文献資料の検討を通して過去の経済学者の「真実の姿」を明らかにすることではなく、過去の経済学者の主著の理論的検討を通して彼らの間の「隠された関係」を明らかにすることであると述べた。そして、経済思想史研究は過去の経済学者たちの肖像の「博物館」に衰退してはならず、むしろ過去の経済学者たちの業績の検討に基づいて現代の経済学者たちに情報を発信する「情報センター」の役割を果たすべきであると述べた（Morishima 1996, p.92）。こうして森嶋は伝統的な経済学史研究の方法と比較しながら、自身の経済理論研究の方法の優位性を主張した<sup>11)</sup>。

以上のように、菱山の研究方法と森嶋の研究方法は極めて似ている。菱山と森嶋はともにリカードの書簡等の多くの文献を無視し、主著『原理』のみに集中して、これを理論的に検討するという方針を表明しながら、現代的意義の評価が歴史的事実の追求よりも優先するという立場を明らかにした。ただし、こうした方法を採用することについて、菱山はやや謙虚な態度を見せていたが、森嶋はより大胆な態度で、むしろ意欲的であったように思われる。

### 3 日本のリカード研究の独自性と多様性

#### (1) 日本のリカード研究の独自性

日本のリカード研究の独自性は欧米のリカード研究と比較したときに鮮明になる。欧米のリカード研究はスラッファのリカード解釈から刺激を受けながら展開し、スラッファの解釈を支持する研



究者たちが主流派を形成してきた。彼らはスラッファの初期リカードに関する「穀物比率論」解釈や「不変の価値尺度」に関する解釈を支持し、スラッファの経済学の基礎である物的な産業連関構造の論理をリカードの経済学の基礎と見なした。そして、リカードの経済学を「物的比率の論理に基づく価値と分配の理論」と把握しながら、その理論的貢献を明らかにし、現代的意義を評価しようと試みてきた。こうした研究はリカードの経済学の歴史の本来の姿を明らかにすることよりも、スラッファのリカード解釈を支軸としながら、その理論的貢献または現代的意義を評価することを優先しようとする姿勢を表している<sup>12)</sup>。

こうした欧米のリカード研究の主流派と対照的に、羽鳥・中村・千賀を始めとする日本のリカード研究の主流派は、スラッファのリカード解釈に対して批判的な態度を取ってきた。そして、スラッファ批判を契機として、リカードの労働価値理論の発展過程に関する研究に取り組むようになった。彼らはリカードの経済学体系における労働価値理論の役割を重視し、リカード体系を「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」と把握しながら、リカードの労働価値理論の発展過程や論理構成に関する研究に取り組み、欧米には見られない独自の研究成果を生み出してきた。そして、こうした研究は過去の経済学の現代的意義を評価するためにこそ、歴史的事実を追求することが不可欠であるとする彼らの研究方法に由来するものであった。その方法はリカードに「内在」し、その「実像」を明らかにすることを旨とするものだった。

もっとも、欧米のリカード研究においても日本のリカード研究においても、おおむね3つの立場があったといってよい。以下のとおりである。

- 1) スラッファのリカード解釈を支持する立場
- 2) 新古典派的なリカード解釈を主張する立場
- 3) 歴史的事実に基づくリカード解釈を主張する立場

このうち、第1の立場はリカードとスラッファの関係を重視しながら、スラッファの経済学の視点からリカードの経済学の現代的意義を評価することを目指す立場である。欧米では主流派であったが、日本では非主流派の菱山の立場がこれに相当する。第2の立場はリカードと新古典派の関係を重視しながら、新古典派の視点からリカードの経済学の現代的意義を評価することを目指す立場である。欧米ではホルンダー(1979)に代表されるスラッファ派の対抗馬の立場で、スラッファ派と激しい論争を繰り広げた。日本では森嶋の立場がこれに相当する。第3の立場はリカードと現代経済学の関係を過度に強調することなく、むしろリカードの経済学の現代的意義の評価よりも歴史的事実の追求を優先する立場である。欧米ではピーチ(1993)のような非主流派の立場がこれに相当するが、日本ではこうした立場こそが主流派だった。

従って、日本のリカード研究の独自性は日本の主流派の貢献や方法というよりは、歴史的事実を重視する立場が主流派を形成したことにあるといえる。どうして日本では歴史的事実を重視する立場が主流派を形成したのだろうか。それは、直接的には、羽鳥のスラッファ批判を契機として、日本のリカード研究者たちが歴史的事実の追求を重視する立場からリカード研究を推し進めてきたからで

ある<sup>13)</sup>。しかし、さらにその背景を探るためには、明治期以来のリカードの経済学を受容の歴史を検討しなければならない。リカードの経済学はマルクスの経済学との関係で研究されるようになったこと、時論的な課題と離れて抽象的な理論として検討されてきたことなどが知られている<sup>14)</sup>。こうした問題を検討することは本稿の課題を超えるが、日本のリカード研究の独自性の由来はこうしたところに求めることができるように思われる。

## (2) 日本のリカード研究の多様性

日本のリカード研究の多様性は、羽鳥・中村・千賀を始めとする主流派の他に、菱山・森嶋に代表される非主流派が存在したことにある。すでに見たように、菱山はリカードとスラッフアの関係を重視する立場からリカードの経済学を理論的に検討し、その現代的意義を評価しようと試みた。そして、スラッフアがその理論的基礎として産業連関構造の図式を採用することによって、リカードの経済学を再構成したことを評価した。また、森嶋はリカードの新古典派の関係を重視する立場からリカードの経済学の理論的に検討し、その現代的意義を評価しようと試みた。そして、リカードの分配と成長の理論を一般均衡理論の枠組みを用いて再構成し、リカード理論を一般均衡理論の先駆的貢献として評価した。これらの研究において、菱山と森嶋はともに現代的意義の評価が歴史的事実の追求よりも優先するという立場を鮮明にしていた。

日本の非主流派のうち、菱山の立場は欧米の主流派であるスラッフア派の立場に近く、森嶋の立場は欧米の主流派の対抗馬である新古典派の立場をさらに徹底した立場であるといえる。先述のとおり、欧米のリカード研究では、スラッフア派や新古典派のような現代的意義の評価を重視する立場が強かったが、日本のリカード研究では、それらに近い菱山や森嶋な立場はあまり強いとはいえなかった。日本では、むしろ歴史的事実を重視する立場が主流派を形成してきた。とはいえ、そうした状況の中でも菱山や森嶋のような非主流派のリカード研究が生まれ、主流派との間で大きな対立や論争を生じることなく、主流派のリカード研究と共存してきたことは、日本のリカード研究の多様性を表しているといっていよう。

ここで、日本のリカード研究の主流派、非主流の菱山、同じく森嶋の3つの立場を、スラッフアのリカード解釈、リカード体系における労働価値理論の役割、歴史的事実の追求という3つの点に対する態度について比較するなら、次頁の表のようになる。主流派はスラッフアの「穀物比率論」解釈を批判したが、スラッフアの解釈を継承し発展させた部分もあった。労働価値理論の役割を重視し、その研究に取り組んだ。現代的意義の評価のためにこそ、歴史的事実の追求を重視とした。菱山はスラッフアの解釈を全面的ではなかったが、かなり受け入れた。所与の生産条件に基づく価格決定の原理という広い意味での労働価値理論の役割を評価した。歴史的事実の追求は必ずしも重視しなかった。森嶋はスラッフアの解釈を強く批判した。労働価値理論の役割は否定した。歴史的事実の追求はやはり重視しなかった。

このように日本のリカード研究の3つの立場はじつに多様である。それらは欧米のリカード研究

日本のリカード研究の主流派／菱山／森嶋の比較

	スラッフアの解釈	労働価値理論の役割	歴史的事実の追求
主流派	ある程度評価	重視	重視
菱山	重視	ある程度評価	軽視
森嶋	強く批判	否定	軽視

の3つの立場と対応しているが、必ずしも同じではない。日本の主流派は歴史的事実の追求を徹底する立場を取ったが、その結果、欧米のリカード研究には見られない独自の研究成果を生み出してきた。菱山の立場は欧米のスラッフア派の立場に近いが、彼はスラッフアのリカード解釈を安易に支持することなく、むしろリカードとスラッフアの系譜的關係を独自の視点で再構成した。森嶋の立場は欧米の新古典派の立場に近いが、彼はより徹底した新古典派的なリカード解釈を提示した上で、リカードから始まる経済学の歴史を独自の視点で再構成した。こうした意味で、日本のリカード研究の3つの立場はそれぞれ固有の立場であり、それぞれリカード研究に対する独自の貢献を生み出してきたといえる。

こうした日本のリカード研究の多様性は何に由来するのだろうか。先述のように、主流派の立場は明治期以来のリカードの経済学を受容の歴史に由来するといえそうである。この意味で、歴史的事実の追求を重視する主流派の立場は、日本固有のリカード研究の立場といえる。他方、菱山はスラッフアの経済学の研究者であり、スラッフアから影響を受けながらリカード研究に取り組んだ。森嶋は一般均衡理論の研究者であり、当初、ヒックスから影響を受けながら自身の経済学研究を推し進めた後、マルクスやリカードの研究に取り組んだ。こうして菱山と森嶋はスラッフアやヒックスといった現代経済学の大家から影響を受け、その結果、現代経済学の視点からリカード研究に取り組むこととなった。この意味で、現代的意義の評価を重視する非主流派の立場は、主として海外に由来するリカード研究の立場であるといえるかもしれない。

おわりに

本稿では、日本のリカード研究の独自性と多様性を明らかにしようと努めてきた。日本のリカード研究の独自性は、主流派の研究者たちがスラッフアのリカード解釈の批判を契機に、リカードの経済学の歴史的本来の姿を追求してきたことであり、あるいはそのような立場の研究者たちが主流派を形成したことだった。こうした日本のリカード研究の状況は欧米のリカード研究の状況と明らかに異なる。また、日本のリカード研究の多様性は、主流派と異なる立場の非主流派の研究者たちがリカードの経済学の理論的貢献や現代的意義を評価しようと試みてきたことであり、そうした立場の研究が主流派の研究と共存してきたことである。ただし、日本の非主流派の立場は欧米のスラッフア派や新古典派の立場に近いが、同じではなかった。日本の非主流派の立場は日本のリカー

ド研究の多様性を表すと同時に、その独自性を表すといえるだろう。

スラッファ編『リカード全集』刊行後、欧米のリカード研究では、スラッファのリカード解釈を支持する研究者たちが主流派を形成したが、彼らのようなスラッファ派とホルンダーを始めとする新古典派の間で激しい論争が繰り返されてきた。その後、ピーチが日本の主流派のようにリカードの経済学の歴史的本来の姿を追求する立場からリカード研究に取り組むようになったが、その結果、スラッファ派、新古典派、ピーチの間で三つ巴の論争というべき状況が生み出されてきた。ところが、日本のリカード研究では、歴史的事実の追求を重視する研究者たちが主流派を形成するとともに、欧米のスラッファ派や新古典派に近い立場から現代的意義の評価を重視する研究者たちが現れたが、彼らの間で欧米で見られたような激しい対立や論争を生じることはなかった。このことも日本のリカード研究の独自性の一つといえるかもしれない。

しかしながら、どうして日本のリカード研究においては、異なる3つの立場の間で、欧米に見られたような激しい対立や論争を生じることがなかったのだろうか。日本のリカード研究には、互いに異なる立場の研究を尊重する傾向があったのだろうか。あるいは、激しい対立や論争を避けようとする傾向があったのだろうか。そして、こうした傾向は「和を以て貴しとなす」ともいわれる日本の文化的背景に関係しているのだろうか。これらの問題を検討することは筆者の能力を超えるので何とも言えない。ただし、対立や論争がないということには功罪両面がある。日本のリカード研究についても、激しい対立や論争が見られなかったことは、必ずしも望ましいことだったとはいえない。欧米のリカード研究に見られるような、激しい対立や論争を厭わずに研究を続ける姿勢から学ぶべきこともあるかもしれない。

[謝辞] 本稿は、JSPS科学研究費補助金基盤研究(A)「リカード・マルサス論争と古典派経済学の展開：その交錯と対抗および現代性の研究」(課題番号17H00982)、基盤研究(C)「日本のリカード研究の独自性と多様性に関する研究」(課題番号15K03376)の助成を受けた研究成果である。

## 注

- 1) スラッファ編『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究史については、真実2000；水田1985；中村2007；千賀2006を参照。また、欧米のリカード研究史については、福田2012を参照。
- 2) 羽鳥は1965年開催の第29回経済学史学会大会(小樽商科大学)における報告「初期リカードの分配論」の中で、続いて同年発表の論文「初期リカードの価値と分配の理論」の中で、スラッファの「穀物比率論」解釈を批判した。欧米では、1970年代以降、ホルンダーがスラッファ批判を開始するが、羽鳥の批判はホルンダーよりもかなり早かった。
- 3) 日本の初期リカード研究は、羽鳥のスラッファ「穀物比率論」批判に始まり、千賀の「部門別利潤率規定論」解釈の登場によって大勢が決した。これらの議論の詳細については、福田2008を参照。とくに羽鳥のスラッファ批判については、福田2015, pp.169-70を参照。

- 4) 日本のリカード労働価値理論の研究は、スラッファの解釈を批判的に継承した羽鳥の「修正論」研究によって本格化し、これに続いた中村や千賀が独自の解釈を生み出していった。これらの議論の詳細については、福田2014を参照。とくに羽鳥の修正論研究については、福田2015, pp.171-73を参照。中村の連動論批判の論理については、福田2016, pp.57-56を参照。
- 5) 羽鳥はスラッファの『原理』理論構造の解釈を発展させる形で、彼自身の『原理』理論構造の解釈を生み出した。福田2015, pp.169-70を参照。
- 6) 中村は羽鳥の『原理』理論構造の研究を継承し、独自の形で発展させた。この頃の中村の研究にはマルクスの影響を見ることができる。福田2016, pp.56-57を参照。
- 7) 菱山はケネーの研究者だったが、スラッファ編『リカード全集』やスラッファ『商品による商品の生産』が刊行された頃から次第にリカードに関心をもつようになった。その成果が『リカード』である。その詳細については、福田2018を参照。
- 8) 森嶋『リカードの経済学』は最初海外で出版され、後に日本語に翻訳されたものであるから、森嶋のリカード研究を日本のリカード研究に含めることが適切かどうかは微妙であろう。とはいえ、本稿では日本を代表する理論経済学者によるリカード研究ということで、日本のリカード研究に含めて検討することとした。森嶋『リカードの経済学』は欧米のスラッファ派による批判を引き起こし、さまざまな論点について論争が繰り返された。森嶋のリカード解釈と論争の詳細については、福田2011を参照。
- 9) 羽鳥はリカード研究に本格的に取り組む以前に、彼自身の経済学史研究の方法を確立していた。羽鳥の研究方法はその後の日本のリカード研究者たちに受け継がれていくことになった。日本のリカード研究の方法については、福田2008, pp.54-57を参照。とくに羽鳥の研究方法については、福田2015, pp.173-75を参照。
- 10) 菱山は『リカード』冒頭で自身のリカード研究の方法について極めて抑制的に述べた。しかし、『ケネーからスラッファへ』を執筆する頃には、以前よりも明確にスラッファの解釈を支持するようになり、その研究方法も以前よりも明確に歴史的事実を追求する意義を否定するようになった。菱山の研究方法については、福田2018, pp.3-5を参照。
- 11) 森嶋は『リカードの経済学』冒頭で自身のリカード研究の方法について論じた。その後、『リカードの経済学』に対する欧米のスラッファ派の批判を受けて、これに反批判するために執筆した論文の中でもリカード研究の方法についてさらに論じた。福田2011, pp.56-57を参照。
- 12) スラッファ派の代表的な論者として、Maurice Dobb, Pierangelo Garegnani, Luigi Pasinetti 他を挙げることができる。近年では、Heinz Kurz, Giancarlo deVivo 他を挙げることができる。
- 13) 中村は1972年開催の第36回経済学史学会大会（松山）におけるシンポジウムの中で、1965年大会における羽鳥のスラッファ批判の報告を聞いて衝撃を受けたことを述懐している。入江1973, pp.11-12、福田2016, p.60を参照。
- 14) 日本へのリカードの導入は、スミスやJ.S.ミルよりも遅く、マルクスやマーシャルとの関係において研究されるようになったという。近年のリカード導入史の研究として、出雲2015、竹永2014他がある。

#### 参考文献

- Hollander, S. 1979, *The Economics of David Ricardo*, Toronto: University of Toronto Press. 菱山 泉・山下 博 (訳) 1998 『リカードの経済学』全2巻, 日本経済評論社
- Morishima, M. 1989, *Ricardo's Economics*, Cambridge: Cambridge University Press. 高増 明・堂目卓生・吉田雅明 (訳) 2003 『リカードの経済学』(森嶋通夫著作集6) 岩波書店

- Morishima, M. 1996, Morishima on Ricardo: Two Replies, *Cambridge Journal of Economics*, 20, pp.91-109.
- Peach, T. 1993, *Interpreting Ricardo*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols, Cambridge: Cambridge University Press. 堀 経夫他 (訳) 1969-99 『デイヴィッド・リカード全集』全11巻, 雄松堂書店
- Sraffa, P. 1951, Introduction, in Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, vol 1, pp.xiii-lxii. 堀 経夫他 (訳) 1969-99, 第1巻, pp.xxiii-lxxxiii.
- Sraffa, P. 1960, *Production of Commodities by means of Commodities*, Cambridge: Cambridge University Press. 菱山 泉・山下 博 (訳) 1962 『商品による商品の生産』有斐閣
- 福田進治 2008 「日本の初期リカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』20, pp.41-62.
- 福田進治 2011 「森嶋通夫のリカード解釈をめぐる論争」『人文社会論争 社会科学編』26, pp.55-71.
- 福田進治 2012 「欧米のリカード解釈論争の展開 - 1990年代以降の状況 -」『マルサス学会年報』21, pp.47-70.
- 福田進治 2014 「日本のリカード研究 - 労働価値理論を中心に -」『マルサス学会年報』23, pp.1-33.
- 福田進治 2015 「羽鳥卓也のリカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』33, pp.167-78.
- 福田進治 2016 「中村廣治のリカード研究」『人文社会論争 社会科学編』35, pp.53-65.
- 福田進治 2018 「菱山泉『リカード』の再検討」『マルサス学会年報』27, pp.1-29.
- 羽鳥卓也 1963 『古典派資本蓄積論の研究』未来社
- 羽鳥卓也 1965 「初期リカードの価値と分配の理論」『商学論集』34(3), pp.91-151.
- 羽鳥卓也 1972 『古典派経済学の基本問題』未来社
- 羽鳥卓也 1982 『リカード研究』未来社
- 羽鳥卓也 1995 『リカードの理論圏』世界書院
- 菱山 泉 1979 『リカード』(『経済学者と現代』②) 日本経済新聞社
- 菱山 泉 1990 『ケネーからスラッファへ - 忘れえぬ経済学者たち -』名古屋大学出版会
- 菱山 泉 1993 『スラッファ経済学の現代的評価』京都大学学術出版会
- 入江 奨 1973 「[学界展望] リカード研究における西欧と日本」『経済学史学会年報』11, pp.11-20.
- 出雲雅志 2015 「戦前日本のリカード研究」『経済研究所年報』28, pp.133-62.
- 真実一男 2000 「我国の戦後リカード研究の回顧」『経済学史学会年報』38, pp.76-82.
- 水田 健 1985 「リカード研究」『経済学史学会年報』23, pp.13-22.
- 中村廣治 1975 『リカード体系』ミネルヴァ書房
- 中村廣治 1996 『リカード経済学研究』九州大学出版会
- 中村廣治 2007 「わが国におけるリカード研究」『商経論叢』43(1), pp.67-77.
- 中村廣治 2009 『リカード評伝 - 生涯・学説・活動 -』昭和堂
- 千賀重義 1972 「初期リカードにおける価値と貨幣の理論」『経済科学』19(3), pp.91-114.
- 千賀重義 1989 『リカード政治経済学研究』三嶺書房
- 千賀重義 2006 「デイヴィッド・リカード」, 鈴木信雄 (編) 『経済学の古典的世界1』日本経済評論社, pp.175-222.
- 竹永 進 2014 「大戦間期における日本のリカード研究」『経済論集』102, pp.39-106.